

様式1 令和2年度 山梨県立ろう学校評価実施計画書(自己評価・学校関係者評価)

学校目標・経営方針	子どものたくましく生きる力と豊かな言語力を育む ○一人一人の特性に応じた適切な指導及び必要な支援の充実を図る ○自身の力を発揮し、自分が自分らしく生きる力を育成する ○物事に 対し、周囲の人とともに取り組む力を育成する
-----------	---

山梨県立ろう学校校長 岩崎 雄治

本年度の重点目標	1. あらゆる教育活動の場に発達段階に応じたコミュニケーション活動を位置づけ、豊かな人間性を育み、言語力・コミュニケーション力の向上を図る。
	2. 個々に応じた合理的配慮によって、わかりやすい授業を実践し、学力の向上を図る。
	3. 心の教育・キャリア教育を充実し、社会的自立に必要な能力や態度を育成する。
	4. 家庭・地域等との連携及び聴覚障害教育のセンター的機能の充実を図る。
	5. 安心・安全な学校づくり。

達成度	A	ほぼ達成できた。(8割以上)
	B	概ね達成できた。(6割以上)
	C	不十分である。(4割以上)
	D	達成できなかった。(4割以下)

評価	4	良くできている。
	3	できている。
	2	あまりできていない。
	1	できていない。

本年度の重点目標			年度末評価(2月12日現在)			
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策
1	・個々の実態に応じた多様なコミュニケーション手段を活用する。 ・状況に応じてコミュニケーション手段を選択できる力を育成する。 ・あらゆるコミュニケーション場面で日本語の習得及び日本語としての概念の形成を図る。	・聴能研修や手話・発音研修など聴覚障害に関する研修会を実施する。 ・補聴器・集団補聴システムを有効に活用する。 ・集団活動の中で、積極的にコミュニケーションを図るための工夫をする。 ・日常生活や各教科・領域等のあらゆる場面で、個に応じた言語指導をする。	研修の実施状況 聴覚管理の状況 聴覚機器の使用状況 交流及び共同学習 部活動、行事等の実施状況 各教科・領域、行事等の工夫、公開授業(一人一授業の実施)、各種検査の状況、図書 の活用状況	1 手話研修会やSTを活用した難聴研修会等を実施し、教員の専門性を高めることができた。 2 コロナ禍のため交流及び共同学習を実施することができない場合も多かったが、学部内で集会等を実施し、コミュニケーションをとる場面を作った。 3 幼児生の実態に応じた合理的配慮について学部内で共通確認し、集団における学習においても、個に応じた言語指導を行うことができた。	A	1 補聴器の取り扱いや集団補聴システム等については、通信等で積極的に保護者に伝えていきたい。 2 幼児生のコミュニケーション能力を向上させるよう個別学習を充実させながら、それらを活用する交流及び共同学習等の実施を図っていく。 3 個に応じたより良い言語指導が行えるよう、相互授業参観や研修会を充実させていきたい。
2	・子どもが思考するために必要な言葉を身につけさせる。 ・子どもの思考の流れに沿った授業展開をする。 ・発達段階に合ったルーティンワークを設定し継続できるようにする。	・授業では幼児生に確実に伝え、伝わったかどうかを確認しながら進める。 ・幼児生相互の話し合いの場を意識的に作る。 ・本時の目標とまとめを明確にする。 ・幼児生の発言や活動を生かして本時のまとめをする。 ・整理された板書を作る。 ・学習習慣を身につけさせる。	理解させるために有効なコミュニケーション手段の工夫 復唱や言葉による確認 発問・板書計画、ノート作り、プリント、ワークシート ルーティンワーク、朝学習、朝読書、家庭学習、小テスト	1 「なぜそう思ったのか」という思考を促す発問をし、幼児性がどのように考えて発表するのかを待つことを大切に授業を展開させた。 2 授業の狙いを明確にし、授業の初めに幼児生に伝えたり、終わりに振り替える時間を設けたりしながら授業を行った。 3 学校生活全般において学習内容を活用する場面を作ることを意識して取り組んでいく。	A	1 学部研やOJTにおいて「主体的・対話的で深い学び」について授業づくりや支援方法の改善を行っていく。 2 指導案について、発問、板書計画、教室内掲示等について見直し、学部ごとにまとめていく。 3 宿題の目的を明確にして宿題を出すなどし、宿題の内容やかける時間等については、保護者に伝えていきたい。
3	・自己認識・障害認識を深める。 ・社会性・自主性を深める。 ・自己有用感を高める。	・自立活動の中で、自己認識に関する内容を工夫し多く扱う。 ・特別活動の中で、見通しを持たせ、課題を意識しながら取り組めるようにする。 ・働くことに関する学習を充実させ、自己肯定感・効力感を持たせる。	自立活動(聴能・自己理解分野) 交流及び共同学習、部活動、児童会・生徒会活動、校外学習 勤労体験、インターシップ、現場実習、社会科見学等の取り組み	1 高等部において自己認識を高めるためチェックシートを作成して使用し、他者によいところを認めてもらう活動を通して、自己認識を高めることができた。 2 1年ごとに振り返りながら、自己を見つめる学習を行うことで、キャリア・パスポートを作成した。 3 様々な授業の中で、自己肯定感を高めるよう工夫しながら授業を進めることができた。	A	1 1人の学級も多いが、集団でできる学習を実施し、他者理解、自己理解を高めるよう今後も取り組んでいく。 2 キャリア・パスポートについては、今後も学部保護者会や通信等で保護者にも伝えていく。 3 進路学習については、保護者や幼児生からニーズを聞き取り、それに応じた情報を伝えていくようにする。
4	・全校体制で聴覚障害のある全ての子どもと園保護者及び在籍園、学校等関係機関への支援を適切に行う。	・コーディネーター会議を中心とし、より充実した支援やコーディネートのあり方について工夫、改善し、活動の周知と連携の強化を図る。 ・医療・行政・教育・福祉等の外部機関との連携を強化推進する。	コーディネーター会議の活用、専門家との連携・活用、資質向上のための研修及び還流 外部機関との連携及び諸会議の実施、連携協議会の実施、連絡会の実施、連携ケースの情報共有	1 コーディネーター会議を通し、全校幼児生や通級による指導を受ける児生の情報を交換し合い、共通理解をはかることができた。 2 会議をZoomで行うなど、外部機関と連携を取り、情報交換を行いながら個々の幼児性の指導に当たることができた。	A	1 今後も外部の難聴幼児生に体験授業を実施し、ろう学校の存在を知らせていくことが必要である。 2 外部機関との連携を図るとともに、学校の様子をホームページ等で外部に知らせていきたい。
5	・災害発生時に自分の身を守る行動がとれるよう防災教育や避難訓練を計画的に実施する。また、危機管理マニュアルを見直す。	・様々な場面の避難訓練を行い、自らどうすればよいかを子ども自身に考えさせる場面を設定する。 ・危機管理マニュアルを絶えず検討する。	防災教育、避難訓練の計画・実施・振り返り	1 3回の避難訓練を実施した。3回目は日時を知らせずに実施したことで、訓練感を減らすことができた。	A	1 防犯や防災、交通安全についての学習の際、目的をはっきりさせ、幼児生に知らせていく。引き渡し訓練は来年度に行う予定である。

学校関係者評価	
実施日 (令和3年3月1日)	
評価	意見・要望等
4	・個に応じた言語指導が丁寧に行われている。 ・コミュニケーションが大事な児童、生徒にとって、交流や共同学習は大事になる。コロナ禍でも工夫されて実施できていた。 ・ろう学校HP上での補聴器・集団補聴システムなどの情報提供をしていくとともに、その他の手話(日本手話・その他手話)や指文字、キューサインなどさまざまな手段についても広く情報提供することで、ろう学校の存在が知られていくと考える。 ・コミュニケーション育成のためには、集団での学習形態を意図的に作っていく工夫が不可欠である。特に基礎を育てる幼稚部においては個別の学習は最低限にして集団を確保し、基本的なルール作りなどを丁寧に行う必要がある。
4	・発達段階や個々の特性に応じた指導には、先生方大変なご苦労があると思われる。先生方の共通理解の上で、今後もご尽力いただきたい。 ・生活言語(一次的ことば)の発達状況、学習言語(二次的なことば)の発達状況、「9歳の峠」に代表される認知面の発達について、児童生徒の一人ひとりの状況をどう捉えるか、それらに応じた教育課程をどうするのか、を検討することが、子どもの思考・認知発達・学習習慣へと繋がるものと考ええる。 ・教師側が「待つ」ことも大切であるが、1つ目の発問がヒントにならなかつた次の発問をし、それがなければその次の発問を用意しておくことが望ましい。
4	・様々な体験は、キャリア教育にもつながるので、できるだけ機会があるといい。コロナ禍の影響で実施できない部分も出てくるであろうが、できる範囲で実施できるように、計画を進めていただきたい。 ・聴覚障害は周囲から分かりにくい障害であり、社会に出てから、周囲の人たちとかかわりながら生活していくためには、他者理解や自己理解を高め、自分の障害を自分のことばで説明し、理解を得ることが必要である。ろう学校の一貫教育の中で、これからも大切にしていってほしい。
4	・関係機関との連携を密にしながら、支援をお願いしたい。 ・SNSの活用により、より一層の情報提供をしてほしい。 ・「聴能だより」は、以前から外部の方に好評をいただいている。過去に県外から問い合わせをいただいたことがある。バックナンバーを財産として蓄積し、さらに多くの人に役立つ教材や情報になっていくことを期待している。
4	・あらゆる場面を想定して避難訓練、防災教育をしながら、自分の命を自分で守る方法を学んでほしい。 ・個々の障害の程度や発達状況、障害認識に応じて、災害時に取るべき行動の習得方法について取り組んでほしい。防災安全センターを活用した実体験に基づいた学習など。